■リーダーズ・ナウ［在学生インタビュー］

LEADERS NOW!

東南アジア留学が広げた学びの視野

──世界の多様な価値観との出会いが未来を形づくる原動力に

◉経済学部 3年次生　渡部 朔士 さん

国際的視野で経済を学びたいと、ベトナムやマレーシアへ留学した渡部さん。現在はその経験を生かして、自分と同じように留学を目指す関大生たちのサポートをさまざまな形で行っている。キャンパス内にある異文化コミュニケーションを体験できる学習スペース「Mi-Room※1」で、留学の体験談やサポート活動の話を聞いた。

渡部 朔士──わたなべ さくじ
■2004年大阪府生まれ。大阪府立刀根山高等学校卒業。GDP成長率の高い東南アジアに興味を持ち、現地で経済を学ぶためにベトナム、マレーシアへ留学。帰国後は学生留学アドバイザー「SAPA」として関大生の留学実現をサポート。「Mi-Room」の学生スタッフとしても活躍中。

▲プトラジャヤのペルダナ・プトラとともに

渡部さんが経済に興味を持ったきっかけは、高校時代に見た株式市場のニュースだった。コロナ禍での経済不況による株価への影響など、世界的な動きをネットや新聞を通じて自分でも調べ、大学は経済学部を目指した。経済以外にも関心が広がる可能性があったため、興味や目標に合わせて、体系的に学ぶことができるカリキュラムに魅力を感じて関西大学へ進学。入学後にはGDP成長率が高い東南アジアに注目し、1年次生の冬には海外研修プログラムでベトナムのFPT大学に短期留学した。

留学中、特に驚いたのは共に学んだ現地学生たちのレベルの高さだった。「日本と同じ第二言語の英語を、皆が流暢に話す。授業でのプレゼンテーションも完成度が高かった。片言の英語が精一杯だった僕はあまりの実力の差に衝撃を受けました。その時、海外のトップ大学に留学することを目標にしたんです」。

渡部さんの志望大学は、多国籍の人種が集まるマレーシア最難関のマラヤ大学。合格すれば関西大学からは初の留学生となる。国際部で情報収集を続け、GPAやIELTSなど留学に必要な学力や英語力をレベルアップし、書類審査と面接試験を無事にクリアして旅立ったのは2年次生の2月。

約半年間の学びは刺激的なことばかり。自分の意見を形成する過程にAIを取り入れるなど、新たな学びの視点も多かったそう。

▲ヌグリ・スンビラン州のモスク前で

▲マラヤ大学のゲート前で伝統衣装を着て

▲マラヤ大学の講義風景

▲マレーシアの「ロティ・ティッシュ」と呼ばれる独特な菓子

▲ハリラヤで訪れた友人宅

▲友人のいとこの結婚式で

現地の友人もできて、イスラム教のラマダン明けの祭りであるハリラヤや、友人のいとこの結婚式にも招待されるなど、異なる文化や慣習に接する貴重な経験になった。

帰国後は、留学を目指す関大生をサポートするスタッフ「SAPA※2」として、学内の留学相談会などイベントにも参加している。志望する海外大学へ留学したことのあるアドバイザーに個別で質問できるのも好評だ。

Mi-Room

また、日本の学生が留学生と気軽に交流できるスペース「Mi-Room」の学生スタッフ「GTA※3」として、カウンター対応や国際交流イベントの企画・運営を担当している。「留学の情報収集ができて、各国の多様な価値観を持つ人たちと出会える場所です。GTAである僕自身も視野が広がり、日本にいながら世界各国の友人ができたことも意義深いですね」。

一方で、国際経済コースゼミの授業にも熱心に取り組む。留学経験がある学生や交換留学生も多く在籍するため、プレゼンテーションはすべて英語で行うほか、各国の暮らしに密着したリアルな経済について知ることもでき、毎回新鮮な気持ちで臨んでいる。

マレーシア留学で現地の環境問題に興味を持ち、帰国後には環境社会検定試験（通称：eco検定）にも挑戦した渡部さん。将来はその知識も生かしてESG投資などに関連した海外での仕事がしたいと考えているそう。「いろいろな国に駐在することで、仕事を通してその国の文化などに触れられる刺激的な働き方がしたいです」。

※1 Mi-Room＝Multilingual Immersion Room
千里山キャンパス第2学舎にある国際交流を実体験できるコミュニケーション・スペース。留学生や留学経験者との交流ができ、定期的にイベントも開催される。また、主に留学生による各国の文化や言語を学べるさまざまなセッションが開催されている。

※2 SAPA＝Study Abroad Peer Advisor
関大生の留学実現をサポートする学生留学アドバイザー。留学希望の学生は留学経験者であるSAPAにさまざまな質問や不安について相談できる。

※3 GTA＝Global Teaching Assistant
Mi-Roomの学生運営補助スタッフ。国際交流や世界の言語・文化に興味がある学生が多く、積極的にMi-Roomの運営を支えている。

音楽のような美しい日本語の響きに魅せられて

──日本の文化と言語を愛し、言葉の力で未来を切り拓く

◉文学部 2年次生　マスード・アファフさん

日頃から日本の小説を愛読し、今では母国の言葉よりも自然に出てくるというほど流暢に日本語を使いこなす留学生のマスード・アファフさん。故郷から遠く離れた“日本”という国に惹かれ、将来はこの国で働きたいという夢を叶えるために今も猛勉強中だ。

▲国語辞典を一冊の本のように読むマスードさん

▲大阪・関西万博にボランティアで参加

「初めて耳にした日本語は、美しい音楽のようでした」と話すUAEからの留学生マスード・アファフさん。物心ついた頃から兄姉と一緒に日本のアニメやドキュメンタリー番組を見ていたことから日本語に興味を持った。しかし地元に日本語学校はなく、独学で勉強を開始。辞書で言語の知識を増やし、文章の勉強には小説や好きな日本人アーティストのインタビューを教材にしたという。

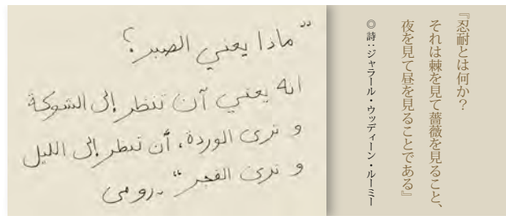
高校卒業後、念願叶って渡日し、最初の1年間は大学進学を目指して日本語学校で学んだ。そこで教員から「小説家になりたいという夢があるのなら、さらに高い目標を目指すべきだ」と励まされ、進学先を探す中で出会ったのが関西大学だった。幅広いカリキュラムや成績優秀者への表彰制度などに魅力を感じたことに加え、実際に千里山キャンパスへ足を運んだ際には、まるで森を歩くような緑の豊かさにも惹かれたという。「UAEには、こんなに自然に恵まれた大学はありません。心癒やされながら学べる環境は理想的だと感じました」。

現在は文学部の2年次生。授業はすべて日本語で行われるため最初は苦戦もしたが、今は無理なく楽しみながら受講できるまでになった。大学受験の面接で「この先生の授業を受けたい！」と感じた、国語学の森勇太教授ゼミにも熱心に通う。「日本語の変遷を学んだり用例採集を用いて単語を分析したりと、自分がやりたかった“日本語をより深く学ぶ”ことができて、これ以上ない幸せです」。今後はビジネスや経済、健康・スポーツに関する授業など新たな分野も学びたいと意欲的だ。また学業以外にも、日本の高校生に英語翻訳の添削指導をし、大阪・関西万博では「ひょうごフィールドパビリオン」の物産展でボランティアスタッフとして勤務するなど、アクティブに過ごしている。

愛読書の『舟を編む』（三浦しをん 著）

マスード・アファフ
■アラブ首長国連邦（UAE）アブダビ出身。自国では辞書や小説などを駆使して独学で日本語を習得。地元の高校Indian School Al-Ainを卒業後、来日してECC日本語学院神戸校へ1年間通い、2024年に関西大学文学部へ正規留学生として入学。現在は念願だった国語学ゼミに所属し、日本語の理解をより深める毎日を送る。

好きな言葉は、13世紀の神秘主義詩人、ジャラール・ウッディーン・ルーミーの『忍耐とは何か？ それは棘を見て薔薇を見ること、夜を見て昼を見ることである』。「忍耐とはじっと座って待つことではなく、その先を見越すことだという意味です。高校卒業後は経済的な理由から留学もすぐには叶いませんでした。それでもあきらめずにいられたのは、この言葉が私の心を支えてくれたから。そのおかげで今の私があります」。



▲大好きなルーミーの詩の一節（マスードさん自筆）

帰国しても母語のウルドゥー語がスムーズに出ない時もあるほど、今では日本語が馴染んでいる。「昔はコミュニケーションが少し苦手でしたが、日本語なら話したいことも表現しやすく、積極的に話せるようになりました。日本語に出会えて本当によかったです。将来は翻訳家として働きながら、日本語の小説を書くのが夢です」。

母国で満月の夜によく行く近所の砂漠（右端がマスードさん）▶